

学校や公園で雨水貯留

府検討ゲリラ豪雨に対応

近年多発しているゲリラ豪雨などに対応するため、京都府は小学校など公共施設を活用した雨水の貯留・浸透施設設置の検討に乗り出す。河川改修といった従来型の対応にとどまらず、流域で大雨を受け止める治水対策を探り、水害に強い地域づくりを目指す。

貯留・浸透施設によって豪雨時に川に流れ込む雨水を抑え、川のはんらんによる水害を防ぐ。下水道では処理しきれない大量の雨水が地表にあふれて浸水被害を起こす都市型水害への対応も図る。

具体的な市町村と連携して、小中学校のグラウンドや公共施設の駐車場、公園などを貯留施設に活用できないか調査する。グラウンドなどの周囲を高さ数十センチの板で囲むことで、一時的な貯水池代わりとする案だ。

浸透施設を設置に向けては、これまで蓄積した掘削調査のデータを活用して府内の土質を調べる。砂地など雨水がしみ込みやすい箇所があれば、雨水を一時ため込んで地中にしみ込ませる「浸透ます」を設置するなどして、どれほど川への流入が抑えられるかを調べる。

現状では河川改修やダム建設が治水の主役だが、費用も時間もかかる上、整備が進んでも想定外の豪雨には対応できないという問題がある。国土交通省が5月に雨水浸透施設の

整備マニュアルをまとめたこともあり、府は貯留・浸透施設を治水策の一つとして検討することにした。

府河川課は「ゲリラ豪雨などは、これまでの治水対策では対応しきれない。『川の中』だけの対策から発想転換し、今後2〜3年かけて『川の外』での対策を検討したい」と話している。

（目黒重幸）

平成22年8月20日
京都新聞（朝刊）